



日本組織培養学会

会員通信

第121号

平成20年12月15日

発行者

* 藤井 万紀子 (愛知県がんセンター・
分子腫瘍)

小原 有弘 (医薬基盤研・細胞バンク)

*責任者連絡先

〒464-8681

愛知県名古屋市千種区鹿子殿1-1

愛知県がんセンター研究所

分子腫瘍学部

TEL : 052-764-2993

目次

1. 平成20年度第1回幹事会・総会報告	2
来期会長・幹事選挙結果報告	…… 古江-楠田 美保 … 2
名誉会員推戴、評議員推薦・承認 (リスト)	…… 2
平成19年度各種委員会活動報告	…… 間中 研一 ………4
平成19年度決算報告、平成20年度予算案	…… 高橋 君子……… 5
2. 第81回大会を終えて	
大会長報告	…… 中村 幸夫 ……… 9
奨励賞審査結果	…… 鈴木 崇彦 ……… 10
奨励賞受賞者感想文 横浜市立大学大学院 国際総合科学研究科	… 相原 祐子…10
3. 平成20年度第2回幹事会報告	………11
新旧幹事の引継ぎにおける諸事項について	… 古江-楠田美保、間中研一 … 11
来期新幹事体制について	……… 鈴木 崇彦 …… 16
4. 第82回大会ご案内	……… 間中 研一 …… 17
5. 故・黒田行昭先生を偲んで	
……静岡県立大学大学院・生活健康科学研究科	… 加治 和彦…… 19

1. 平成 20 年度 第 1 回幹事会・総会報告

平成 20 年度第 1 回 幹事会報告

日時：5 月 18 日（日）15:00～18:00

場所：理化学研究所筑波研究所バイオリソース棟 1 階会議室

出席者：岡本哲治、鈴木崇彦、星 宏良、古江-楠田美保、水澤 博、高橋君子、間中研一、藤井万紀子、小原有広、増井 徹、中村幸夫

欠席者：小山秀機、西 義介、菅 幹雄

オブザーバー：浅香 勲、伊藤丈洋、坂野俊宏、佐藤元信、山本直樹

[来期会長・幹事選挙結果報告]

（古江-楠田美保 幹事）

4 月 9 日 独・医薬基盤研究所生物資源研究部細胞資源研究室において、水澤博会員による立ち会いのもと、任期 2009 年 4 月から 2013 年 3 月となる新役員を会員郵便投票により以下のように選出し、総会にて報告を行いました。開票結果を下記にお知らせいたします。（敬称略）。

会長： 鈴木崇彦（東大）

幹事：

藤井万紀子（愛知がんセンター）

浅香 勲（京都大学・iPS 細胞研究センター）

山本直樹（藤田保健衛生大）

小原有弘（基盤研・細胞バンク）

中村幸夫（理研）

佐藤元信（HSRRB）

伊藤丈洋（機能性ペプチド研）

坂野俊宏（マンダム）

次点

増井 徹（基盤研・細胞バンク）

[名誉会員推戴]

下記 6 名の先生を名誉会員に推戴申し上げた。

難波 正義 先生（公立新見短期大学長、元・岡山大学医学部長）

黒木 登志夫 先生（岐阜大学長、東京大学名誉教授）

丸野内 棣 先生（元・藤田保健衛生大学・総合医科学研究所 所長）

小山 秀機 先生（元・横浜市立大学・木原生物学研究所 生物工学部門 教授）

野瀬 清 先生（元・昭和大学薬学部長 教授）

安本 茂 先生（元・神奈川県立がんセンター臨床研究所 科長、共同研究部長）

[評議員推薦]

任期切れにより、任期 2009 年度～2012 年度の評議員を再任および新任するよう推薦した。

(合計 60 名、*印は新規 14 名、敬称略)

- 1 赤池 敏宏 東京工業大学大学院
- 2 浅香 勲* AGC テクノグラス株式会社 TC 試薬部 試薬グループ
- 3 伊井 一夫* ロンザジャパン (株)
- 4 井出 利憲 愛媛県立医療技術大学
- 5 伊藤 丈洋* (株) 機能性ペプチド研究所
- 6 上田 忠佳* 大日本住友製薬グループ DS ファーマバイオメディカル株式会社
- 7 絵野沢 伸* 国立成育医療センター
- 8 大野 忠夫 セルメディシン株式会社
- 9 岡本 哲治 広島大学大学院 医歯薬学総合研究科 分子口腔医学・顎顔面外科学
- 10 加治 和彦 静岡県立大学
- 11 鎌田 伸之 広島大学
- 12 菅 幹雄 ゼリア新薬工業株式会社
- 13 蔵本 博行 (財) 神奈川県予防医学協会
- 14 黒木 登志夫 岐阜大学
- 15 小原 有弘* 独立行政法人 医薬基盤研究所
- 16 小山 秀機 横浜市立大学・木原生物学研究所
- 17 坂野 俊宏* (株) マンダム中央研究所
- 18 佐藤 敬喜 セルメディシン株式会社
- 19 佐藤 元信* 財団法人ヒューマンサイエンス振興財団ヒューマンサイエンス研究資源
バンク
- 20 佐藤 靖史 東北大学加齢医学研究所
- 21 佐野 恵海子 東京大学大学院 新領域創成科学研究科メディカルゲノム
- 22 澤田 秀和* 財団法人ヒューマンサイエンス振興財団ヒューマンサイエンス研究資源
バンク
- 23 柴沼 質子 昭和大学
- 24 清水 信義 慶應義塾大学先端研 GSP センター
- 25 白畑 實隆 九州大学
- 26 杉山 俊博 秋田大学
- 27 鈴木 崇彦 東京大学大学院 医学系研究科附属疾患生命工学センター放射線研究領域
- 28 鈴木 利光 福島県立医科大学 病理学第二
- 29 鈴木 文男 広島大学
- 30 関口 守正 日本免疫治療研究会 瀬田クリニック
- 31 高橋 君子 会津大学 短期大学部

- 32 竹内 昌男 (独) 医薬基盤研究所
 33 田仲 昭子 森永乳業 (株)
 34 田中 憲穂 (財) 食品薬品安全センター
 35 田原 栄俊* 広島大学 大学院医歯薬学総合研究科 (薬)
 36 張 雁* 広島大学 大学院医歯薬学総合研究科 (薬)
 37 筒井 健機 日本歯科大学 生命歯学部 薬理学講座
 38 中村 幸夫* (独) 理化学研究所 筑波研究所
 39 永森 静志 杏林大学
 40 難波 正義 (財) 岡山医学振興会
 41 西 義介 長浜バイオ大学
 42 野瀬 清 昭和大学
 43 蓮村 哲 木場病院
 44 秦 宏樹 東京逡信病院 産婦人科
 45 花岡 文雄 学習院大学
 46 藤井 万紀子* 愛知県がんセンター 分子腫瘍学部
 47 船津 和守 九州大学
 48 古江一楠田美保 (独) 医薬基盤研究所 生物細胞資源研究部
 49 許 南浩 岡山大学
 50 星 宏良 (株) 機能性ペプチド研究所
 51 増井 徹 (独) 医薬基盤研究所 生物細胞資源研究部
 52 松村 外志張 (株) ローマン工業
 53 間中 研一 獨協医科大学 国際教育研究施設 研究部
 54 丸野内 棣 名古屋医専
 55 水沢 博 (独) 医薬基盤研究所
 56 三井 洋司 徳島文理大学
 57 宮崎 正博 岡山学院大学 人間生活学部 食物栄養学科
 58 安本 茂 神奈川県立がんセンター研究所
 59 山本 直樹** 藤田保健衛生大学・総合医科学研究所
 60 渡邊 正己 京都大学原子炉実験所

**山本直樹会員は、2008年12月9日、臨時幹事会にて追加推薦を受けた。

[平成19年度各種委員会活動報告]

「In Vitro Biology」と「TCRC」の合本出版について

(岡本哲治 会長)

Springer社から二者合本とすることについて打診があった。

特徴：1) インパクトファクターの付く学会誌となる。

2) 国内投稿審査は日本側事務局（日本組織培養学会）で行う。

3) 出版部数を拡大することが狙い。販売部数によっては、印税が最大100万円程度本学会に支払われる可能性がある。会費の値上げは不要であろう。

* 過去、SIVBと共同出版することが提案されたが、この方式では会費値上げなどの負担が増すことから、議論が棚上げになっていた。

4) JTCAとSIVBのジョイント Journal という形態に同意を得ているが、新版での表紙TCRC 標記については未決。

5) J-STAGE（Springer On-Line をリンクする）および(株)レタープレスとの調整が必要。

幹事報告

学会財務会計報告（高橋君子 財務・会計担当幹事）

平成19年度決算報告

平成19年度決算書

（平成19年4月1日～平成20年3月31日）

一般会計

収入の部 勘定科目	(単位:円)		
	平成19年度予算額	平成19年度決算額	備考
前年度繰越金	2,627,117	3,516,617	
正会員会費	1,700,000	1,376,000	学生会員を含む
賛助会員会費	700,000	510,000	
入会金	20,000	27,000	
広告収入	300,000	200,000	
雑収入	80,000	257,673	別刷り収入、印税、金利
購読料	250,000	179,400	
合計	5,677,117	6,066,690	

支出の部 勘定科目	(単位:円)		
	平成19年度予算額	平成19年度決算額	備考
研究誌発行費	1,500,000	1,701,000	26-1, 2, 3・4
会員通信発行費	150,000	80,325	116, 117, 118号
大会補助金	600,000	0	
業務委託費	1,150,000	1,058,192	管理費、会費請求、会誌発送等
幹事会議費	20,000	0	
編集会議費	20,000	0	
雑費	20,000	0	

予備費	20,000	0
講習会テキスト作成費		874,125
支出計	3,480,000	3,713,642
残額	2,197,117	2,353,048
合計	5,677,117	6,066,690

特別会計

収入の部 (単位:円)			
勘定科目	平成 19 年度予算額	平成 19 年度決算額	備考
前年度繰越金	6,048,632	6,906,534	
寄付金収入	120,000	0	
出版収入	20,000	175,500	許先生より
利子収入	2,500	8,449	普通預金利息
雑収入	20,000	25,711	学術調査、NPO 医学中央財団
第 80 回大会収支		1,196,310	
講習会テキスト収入		129,000	
合計	6,211,132	8,441,504	

支出の部 (単位:円)			
勘定科目	平成 19 年度予算額	平成 19 年度決算額	備考
学会奨励賞	300,000	232,597	第 80 回大会奨励賞、賞状印刷代等
細胞バンク委員会	50,000	0	
倫理問題検討委員会	200,000	0	
教育システム委員会	300,000	300,000	
サーバー購入費	250,000	0	
国際代替法学会	300,000	300,000	
会員名簿更新費	300,000	424,083	
雑費	150,000	2,940	証明手数料、振り込み手数料
支出計	1,850,000	1,259,620	
残額	4,361,132	7,181,884	
合計	6,211,132	8,441,504	

平成 19 年度決算はAGCテクノグラス浅香勲先生とマンダム 坂野俊宏先生 の監査・承認をいただきました。

質疑

「講習会テキスト作成費 ¥874,125.-」を平成19年度一般会計支出としたことについて、許会員から、正会員会費減収にある折りに、このような支出には無理はないか、との質問が出された。「講習会テキスト収入 ¥129,000.-」にあるように、テキスト代は講習会によって回収され、また講習者は学会員として入会することとなっているため、会員の大幅な増加が見込める（年間40名以上）ことを説明。テキスト代を今後一般会計扱いとするか特別会計とするかについては次回幹事会などで検討する。

補： 幹事会は、「細胞培養士制度の構築と講習会開催」が、当学会の社会的貢献および会員増強の手段として重要な活動であることを改めて確認し、次期幹事役員による発展に期待することとした。

平成20年度予算案

(平成20年4月1日～平成21年3月31日)

一般会計

収入の部		(単位：円)
勘定科目	平成20年度予算額	備考
前年度繰越金	2,353,048	
正会員会費	1,500,000	学生会員を含む
賛助会員会費	500,000	
入会金	20,000	
広告収入	200,000	
雑収入	200,000	別刷り収入等
購読料	200,000	
合計	4,973,048	
支出の部		(単位：円)
勘定科目	平成20年度予算額	備考
研究誌発行費	1,700,000	
会員通信発行費	150,000	
大会補助金	600,000	
業務委託費	1,150,000	組織培養研究アップロード費用を含む
幹事会議費	20,000	
編集会議費	20,000	
雑費	20,000	
予備費	20,000	
残額	1,293,048	

合計 4,973,048

特別会計

収入の部 (単位：円)

勘定科目	平成 20 年度予算額	備考
前年度繰越金	7,181,884	
寄付金収入	100,000	
出版収入	180,000	
利子収入	8,000	
雑収入	20,000	
合計	7,489,884	

支出の部 (単位：円)

勘定科目	平成 20 年度予算額	備考
学会奨励賞	300,000	第 81 回大会奨励賞
細胞バンク委員会	50,000	
倫理問題検討委員会	200,000	
教育システム委員会	300,000	
サーバー購入費	250,000	
In Vitro Biology 共催費	100,000	
雑費	300,000	
残額	5,989,884	
合計	7,489,884	

幹事会資料 (2008.5.18 第 81 回大会=つくば)

庶務幹事報告 (間中)

公益法人化法の改定における各種情報確認と当学会の在り方について議論を行った。

今後は公認会計士などと相談の上、適当な方向性を見出すこととした。

各種専門委員会報告

研究教育システム委員会

「細胞培養士制度のロードマップ」

アドバンストコースの早期開設の必要性

関東東北地区拠点の開拓

細胞培養士認定指導者の育成と認定方法
倫理問題検討委員会

「企業商品開発に伴う倫理監査を学会会員（大学所属研究者）が請け負うことについての問題点」

第82回大会の世話人指名

間中研一会員（獨協医大）、星宏良会員（機能性ペプチド研）、高橋君子会員（会津大）が、栃木県にて行うこととする。会期は平成21年5月18日（月）・19日（火）とする。

（庶務幹事 間中研一）

2. 第81回大会を終えて

[大会長報告]

中村 幸夫

日本組織培養学会第81回大会を平成20年5月19、20日に文部科学省研究交流センター（茨城県つくば市）において開催いたしました。行き届かない点が多々あったことと思いますが、ご理解とご協力を賜りました会員及び参加者の皆様に、心より感謝の意を表します。

シンポジウムは「ES細胞関連研究の最前線」をテーマに、また、教育システム委員会企画シンポジウムは「先端医療を支える細胞培養技術の現状と将来への課題」をテーマに最先端の話題が提供され、活発な意見交換が行われました。これらのテーマは、従来の日本組織培養学会における主たるテーマ（癌研究等）とは趣を異にするものであり、「培養した細胞を臨床に、即ち人に使用する」という新しい分野に挑戦するテーマでした。一般演題の発表内容も、癌研究等は数が減り、再生医学に関する演題数が増えました。また、一般公開シンポジウムとして開催した「iPS細胞の展望と課題」も同様な流れにあるテーマでしたが、会員以外の多数の参加者を得て、超満員のために発表会場以外の二会場でもテレビ中継することを余儀なくされました。

再生医学研究は、iPS細胞の出現に後押しされて、ブームの真最中ではありますが、それによって、癌研究等の他の分野の研究が衰退しないことを希望いたします。

来年の第82回大会はお隣の栃木県での開催です。皆様との再会及び意見交換を今から楽しみにしております。

追伸：

大会一日目には特別講演の座長を務めて頂き、大会二日目の一般公開シンポジウムでもお元気に質問をされていた黒田行昭先生が、その二日後にご逝去されました。最期の最期まで日本組織培養学会に大きな貢献をしてくださった黒田先生でした。ご冥福をお祈り申し上げます。

[奨励賞審査結果]

平成20年度の日本組織培養学会奨励賞の審査は、例年同様、第81回学術大会において、ポスター発

表形式によって行われた。毎回のことではあるが、奨励賞の審査に当たった先生方は、審査基準に則った非常に公平な採点を実施され、以下の結果となった。

応募された演題は2題で、そのうち「無血清単層培養法によるマウス ES 細胞から神経堤細胞への効率的誘導法の確立」と題して発表された、横浜市立大学大学院国際総合科学研究科理学専攻博士課程の相原祐子さんが受賞された。受賞された演題では、ES 細胞をフィーダー細胞無し、さらに無血清培養法を用いることによって、細胞の分化因子、特に ES 細胞から神経堤細胞への効率的な分化を誘導する分子を特定するという、まさに培養細胞でなければできない、組織培養研究におけるオーソドックスな手法を用いた点が評価されたものと考えられる。一方、今回受賞を逃した発表では、残念ながら、組織培養という観点からの研究内容が希薄であった。奨励賞の選考においては、あくまで、次の世代を担う若手の組織培養・細胞培養研究者を奨励するのが目的であるため、細胞・組織培養の技術を駆使するという研究における要素は、当学会の奨励賞審査において非常に大きなウェイトを占めること理解していただきたい。

奨励賞を受賞された相原祐子さんには、学術大会 2 日目に開催された平成 20 年度日本組織培養学会総会において、賞状、ならびに副賞が、岡本会長より授与された。今後益々の研究の発展を祈念し、当学会での活躍を期待したい。

(文責：教育担当幹事 鈴木崇彦)

[奨励賞受賞者感想文]

横浜市立大学大学院 国際総合科学研究科 相原 祐子

この度は、日本組織培養学会第 81 回大会におきまして奨励賞の栄誉を賜り、岡本哲治学会長をはじめ、日本組織培養学会の皆様方に心より厚く御礼申し上げます。

今回発表させて頂きました演題は、「無血清単層培養系によるマウス ES 細胞からの神経堤細胞の効率的誘導法の確立」です。本研究において、分化誘導の目的とした神経堤細胞は、神経細胞や色素細胞、軟骨細胞や骨芽細胞といった多種の細胞に分化するため第 4 の胚とも呼ばれ、発生学的にも非常に興味深い細胞です。また再生医療の面からも培養法の開発が期待されています。しかし、その発生メカニズムはまだ十分に解明されていません。そこで、我々は、発生メカニズムを解明し、神経堤細胞へ効率的に分化誘導する方法の確立を試みることにしました。現在、万能細胞である ES 細胞から様々な組織への分化制御の研究が進められています。しかし、従来の ES 細胞を用いて神経堤細胞を誘導する実験系は血清やフィーダー細胞を用いていることから、関与する因子を明確にすることが困難でした。そこで、我々は、こうした血清やフィーダー細胞を使用せずに、ES 細胞から神経堤細胞を効率よく分化誘導する方法を開発しました。今回開発した方法は、血清やフィーダー細胞を使用しないことから、神経堤細胞の発生過程の因子の影響を明確にすることを可能とし、発生メカニズムを解明する手段として有用であり、神経堤細胞由来である神経細胞や色素細胞、軟骨細胞や骨芽細胞等の再生医療研究にも貢献するものと考えています。このような研究が出来ましたのも、研究室の諸先輩、内山 英穂先生、古江—楠田 美保先生、浅島 誠先生の御指導あればこそと深く感謝申し上げます。

発表の際においては、諸先生方から非常に参考になる御質問、御意見を頂き大変感謝しております。

今回の受賞を励みに更なる研究の発展に臨みたいと思いますので、今後とも皆様からの御指導、御鞭撻を賜りますよう、何卒宜しく御願申し上げます。

3. 平成 20 年度 第 2 回幹事会報告

開催日時：平成 20 年 11 月 16 日（日）12：00～14：30

会場：愛知県がんセンター・研究所 北館 3 階セミナー室

出席者：岡本 哲治、鈴木 崇彦、高橋 君子、古江一楠田美保、星 宏良、間中 研一、水沢 博、藤井 万紀子、小原 有広

欠席者：小山 秀機、西 義介、増井 徹、菅 幹雄

オブザーバ（次期幹事）

浅香 勲 山本 直樹、小原 有弘、中村 幸夫、佐藤 元信、伊藤 丈洋、坂野 俊宏

記録：古江一楠田美保、間中研一

[新旧幹事の引き継ぎにおける諸事項について]

学会誌 TCRC の発行について

1) In Vitro Cellular & Developmental Biology - Animal (ISSN 1071-2690, Springer)との発行合併について、昨年度から岡本会長へスプリンガー社から提案ある。

○TCRC と In Vitro の併合表紙となるのか？

○出版費：購読者が少なければ出版費用を補填する必要がある。黒字となれば、JTCA へ還元される。

現時点では 100 万円程度のバックが見込めるとのこと。

○インパクトファクターが付帯することについて、積極的な投稿が期待できる。

星会員（機関紙編集委員会）からは、現在論文投稿が低迷していることから、この問題への解決策になるだろうとの意見。また大学院生終論の投稿が見込まれるだろうとのことであった。

○現行編集業務は In Vitro が行っているが、スプリンガー側の意見で、日本国内投稿論文については国内レフリー（JTCA）が責任掲載することになるだろう。

○レタープレスとの契約業務：

機関紙発行業務、その他の会員業務委託（会費徴収、名簿管理）について契約方法を検討する必要がある。

○次回の大会総会に、「併合案」を提出するかどうか、以上の確認などを含めて岡本会長に一任し、幹事会は「併合」について前向きに議論することを確認した。

2) On-Line-Journal 化と J-STAGE について

TCRC No. 1 からのバックナンバーの PDF 化および J-STAGE へのオンライン掲載は、J-STAGE に申請

中であり、審査を通過すれば PDF 化からすべてを無料で行ってもらえる。一部はサンプルとして掲載してもらえた。写真など満足いく質になっている。

新号についてはすでにレタープレスが PDF 化したものを順次（紙出版から半年後に）オンラインにて公開している。ペーパーレス化後には、会費を値下げすることができるのかどうか、雑誌合併の件とも併せて、幹事会は会計財務を慎重に検討する必要がある、とされた。

SIVB Life Time Achievement Award (2009) について

現在、審査が進行中とのこと。JTCA から受賞者が出た場合は、来年のチャールストンでの SIVB の学会でセレモニーが色々有るので、学会をあげて参加する必要がある。（岡本会長）

新法人化法（新非営利法人制度）の施行にあたって

平成 20 年 12 月に一般社団・財団法人に関する法律、公益社団・財団法人に関する法律等が施行されるにあたって、平成 20 年 7 月 29 日（火）、日本学術会議講堂にて日本学術会議科学者委員会学協会による「新法人法への対応シンポジウム—学協会の公益性の確立に向けて—」が催された。各分野からの対応方法を巡る解説が以下のように企画された。

1. 法人における税制の扱い 2. 法人設立に必要な手続きと定款の作成 3. 公益性に関する必要事項の解説 最後には時間が不足するほど終始、活発な質疑応答が交わされた。

その一部を拾ってみると、団体は、その公益性の性格によって税法上の優遇措置が受けられるというもので、公益性の定義が「一般対してさらに開かれたもの」として説明された。また、これまで何らかの法人格を有する学会などは、この新法人化法案にあわせてどこの格付けを受けるかの選択を必要とすることが説明された。560 にもなる条文の説明としては比較的理解できるものであったが、その複雑さの解説、特に公益法人を破棄する場合（解散）においては、会場は失笑を禁じ得なかった。

当学会は、今後これまでのように「人格のない社団」（任意団体）として活動するか、「公益法人」（非営利公益法人）としての許可を得て、税法上の優遇を受けるかの判断をする必要がある。

その社団または財団が「学術、技芸、慈善、祭祀、宗教その他の公益に関する社団又は財団」であること。「営利を目的としないもの」であることが、その要件である。公益とは、益する情報を公開することが求められる。この団体は、定款・社員総会・理事会を有し、財務管理は一般の会社と同様である。

「人格のない社団」における課税率（消費税は別）は、利益の 30%、800 万円以下の場合は 22%であり、一方「公益法人」においては、会員収入は非課税、広告などによる収入などは、見なし寄付として運営赤字補填が可能となる。

このように不十分な解釈ながら、当面、当学会の現在および将来の財政マップを見据えながら、一般・特別会計の一本化など適切な方向を公認会計士などに相談し、方針を定める必要があることをここに報告する。（庶務幹事・間中）

各種専門委員会の再編成について

岡本会長下で4年間活動してきた各種専門委員会を、ここに区切りを設け、これまでの活動と今後の継続性について検討してみてもどうか(鈴木会員)、との提案がなされた。

専門委員会は幹事会の意向によって設置し予算を配分するものであるため、長期停止状態の委員会、将来の活動内容が変わると予想される委員会、また、幹事会の質疑を経ない文書などを公開するなど、委員会を超えた活動を行った委員会など、幹事会の方針を再度確認することが求められた。

幹事会は、すべての運営委員会についてこの3月までに活動報告書・会計報告を提出し、解散することで、全員一致した。また次期幹事会には、運営に必要な運営委員会委員長を速やかに指名し、新たな体制を作るよう求めることとした。

細胞培養基盤技術コースおよび同指導者認定について

研究教育システム委員会の「細胞培養基盤技術コース」ロードマップに基づいて、これまでのところベーシックコースⅠを、第1回(10名)、第2回(6名)を医薬基盤研、第3回(9名)を広島大、第4回(7名)を栃木県立衛生福祉大にて実施してきた。また、本年7月には広島大学歯学部口腔保健学科口腔保健工学専攻の学生を対象に細胞培養実習として同コースを企画し、その14名に対しベーシックコースⅠの修了証を与えた。岡本会長は、同専攻の定期実習として毎年行う方針とのことである。それらの結果、通算合計52名の新入会員を迎えることができた。年内にはベーシックコースⅡ[細胞株の同定法、マイコプラズマの検出法、など]の立ち上げを予定したが、目下具体案を計画する段階にとどまっている。一方、コース企画とともに、早期に細胞培養士指導者を認定することになっている。次期大会にて指導者認定講習会を実施できるよう委員会を中心に指導の範囲、認定の方法など具体策を練っている。

奨励賞制度の一部改革について

奨励賞対象演題発表者の推薦について、推薦の基準「当学会ならではの特徴」を明確にすべきではないか、また発表時の問題点などとして発表時間が短い、本人の発表の姿勢などを評価すべきだが、研究内容の審査になりがち、ポスターでは、聴衆に声が届きにくい。賞金の上限が決められていない。などの意見が出され、鈴木奨励賞担当幹事から別頁のように、奨励賞制度の一部見直しを検討してほしいとの提案がなされた。次期大会においては、ポスター、口演双方が可能な準備をすることにした。推薦書、履歴書に具体的な項目を盛り込むことを検討中である。

第82回大会関連

別頁に第82回大会第1回のご案内を掲載する。大会テーマを「培養細胞に生命を託す=医療に向けての細胞培養研究=」として、特別講演についてはES・iPS研究の最近の動向をお話いただける先生を、目下、古江会員・中村会員の企画においてお願いした。シンポジウムは、特別講演を受けてES・iPSの基礎：許南浩先生、臨床：岡本哲治先生、創薬：古江-楠田先生、各先生に企画をお願いした。

平成20年5月21日にご逝去された故・黒田行昭先生の追悼シンポジウムを開催する。森脇和郎先生にご講演をお願いするとともに、日本環境変異原学会、日本動物実験代替法学会そして本学会の合同で

行うこととした。各学会様には勝手ながら黒田先生から繋がる新しい時代への鎖となるような、それぞれの学会に反映するものをご紹介頂けるようお願いした。幹事の希望意見として、黒田先生ご夫人のご来席およびシンポジストへ TCRC に向けた追悼文の依頼などあり、今後各方面と相談の予定である。

(大会世話人 間中・星・高橋)

会員通信報告

会員通信の発行は、通常年間3～4回です。第81回大会終了時に121号を発行すべきだったが、半年遅くの発行になった。今年度は、大会最終案内掲載の122号を3月に発行する2回のみとの予定となった。次期幹事会においては、早めの原稿依頼、早めのご返信を以て速やかに編集作業が進むことを期待する。また、各委員会も活動の停滞などから原稿を提出できない状況にあるようなので、それぞれの活性化を促すことも必要だ。

今後の発行方法について、PDFのメール配信の案が出されたが、膨大な通信量になるため、メールでは発行のお知らせにとどめてホームページからの閲覧を促すことが賢明であると提案された。今後、この方式によってペーパーレスとするかどうか会員の意見を集めることにする。ちなみに、現在バックナンバー第90号からホームページにて閲覧可能である。(藤井)

財務会計について

細胞培養士認定講習会に関連する入会者は現在までに50名程度あり、ほぼ平衡状態にあった会員数を、右肩上がりに転じさせている。講習会を充実させることは、本学会の会員獲得に大きく貢献するものと考え。ベーシックコーステキスト代支出300部についても講習者1部3000円の売り上げによって、順次回収される見込みである。ただ、この収支勘定項目の分類に明確な基準がなく、総会においてはそのための質疑の必要が生じ、説明の補足を後日会員通信で行うことにして決算報告の承認を得させていただいた。

現行の一般会計・特別会計分離方式は、一定の分類基準が不明確で、また分離の必要性を理解する執行役員はいない。新幹事体制において、法人化新法の動きに合わせるためには、公認会計士の援助を得て、抜本的に見直してはどうか、との意見が出た。(高橋)

各種専門委員会報告

～細胞バンク委員会～

今期は特に活動ができていない。ナショナルバイオリソースプロジェクトが競争的資金に依存し、基盤研も5年ごとの評価を受けるというシビアな状況で、学会への貢献活動がしづらい状況である。研究資源、情報資源のデータベースを統合することについて、文科省がナショナルバイオリソースプロジェクトをどのように展開するのか成り行き不透明な状況である。25年前には細胞バンクを作ることに国に運動することが必要だったが、現状は個々の活動が大事となっている。今後細胞バンク委員会がどうあるべきか、…。(水澤)

～研究教育システム委員会～

細胞培養士の養成を目標とする。アドバンスコースなどのテキスト作成、指導者の育成認定が必要。学会主催のコース以外に、広島大学歯学部保健衛生学部の実習において細胞培養士を認定。衛生福祉大（宇都宮）にて初講習会開催。学校行事などの合間ということで年 2 回程度の開催だろう。今後、卒後研修という形での認定講習会を希望している。広島の専門学校で培養学科を設置し、その講師を培養学会から派遣する可能性がある。

培養コース修了者のフォローアップに、特別枠として学会発表の機会を与えたい。次期大会に受け皿を作る。

今後の課題は、アドバンスコースの設置を急ぐ。教育方針・内容を標準化するため指導講師の認定制度を作る。これまで鈴木が講習会事務局として募集、インストラクターなど中心的に行ってきたが、次期会長に任命されたため、第 6 回以降は交代するのでよろしく願いしたい（間中庶務幹事を指名）。（鈴木）

～機関誌編集委員会～

本年度委員会の開催はなかった。原稿を集めるのが大問題で、機関誌への投稿メリットのある抜本的なアイデアが必要である。In Vitro との合同出版には期待すべきところがある。

学会誌発行形態の検討

In Vitro Cellular & Developmental Biology - Animal (ISSN 1071-2690, Springer) との発行合併について、岡本会長へスプリングァー社から提案ある。

○OTCRC と In Vitro の併合表紙：これについてはまだ結論に至っていない。

○出版費：購読者が少なければ出版費用を補填する必要がある。黒字となれば、JTCA へ還元される。現時点では 100 万円程度のバックが見込めるとのこと。

○インパクトファクターが付帯することについて、積極的な投稿が期待できる。

星会員（機関紙編集委員会）からは、現在論文投稿が低迷していることから、この問題への解決策になるだろうとの意見。また大学院生終論の投稿が見込まれるだろうとのことであった。

○現行編集業務は In Vitro が行っているが、スプリングァー側の意見で、日本国内投稿論文については国内レフリー（JTCA）が責任掲載することになるだろう。

○レタープレスとの契約業務：機関紙発行業務、その他の会員業務委託（会費徴収、名簿管理）について契約方法を検討する必要がある。

○次回の大会総会に、「併合案」を提出するかどうか、以上の確認などを含めて岡本会長に一任し、幹事会は「併合」について前向きに議論することを確認した。

～情報技術利用委員会～

オンライン登録処理のため大会抄録の編集を任されているが、毎大会、締切期日の延長があり、作業期間がただの 2 日という状況で行っている。この状況を改善するために、今大会においては、演題仮登録制を導入し、演題数の早期確認などももくろみたい。いずれにしても抄録の登録締切の厳守を願いた

い。 (坂野)

～倫理問題検討委員会～

本年度は活動していない。 (浅香)

厚生労働省「臨床研究指針」が策定されました。下記の URL などからご覧ください。(増井)

<http://jtca.dokkyomed.ac.jp/JTCA/ethics/20080812rinsyourinrinsicin.pdf>

～渉外担当委員会～

欠席

[来期新幹事体制について]

役割分担 (案) 敬称略

会長： 鈴木崇彦

会長補佐 (会長指名幹事)： 間中 研一

(具体的役割) 庶務・会計幹事、会員通信・情報システム幹事への指示・連絡担当
細胞培養士養成コース参加受付窓口、協賛企業窓口

庶務・会計担当幹事： 藤井 万紀子、山本 直樹

幹事会等会議の招集案内・準備、会計処理、総会における決算書・予算案作成、
その他の業務

会員通信・情報システム担当幹事： 坂野 俊宏、伊藤丈洋

会員通信原稿作成依頼・原稿とりまとめ、印刷会社との連絡、学会ホームページの
維持・更新、大会抄録集原稿作成

奨励賞・学術担当幹事： 浅香 勲、佐藤 元信

大会における奨励賞選考関連業務、学会出版物に関する業務、学会教育活動に関する
業務 (細胞培養士養成コース関連業務の補助)

TCRC 存続するならば原稿収集担当

大会開催に関するサポート (大会長の要請による)

渉外担当幹事： 中村 幸夫、小原 有弘

他学会 (国外を含む) 関連業務、他学会情報の会員への周知 (会員通信、
ホームページ等)、当学会情報の外部への発信、協賛企業の発掘

専門委員会

教育研究システム委員会

委員長： 楠田-古江 美保

委員： 間中 研一、浅香 勲、佐藤 元信、他委員長指名

[業務] 細胞培養士養成コースの完成

ベーシックコース II (細胞の品質管理)、アドバンスコース (内容は検討) の立ち上げ・
開催 (テキストの作成、講師陣の編成、開催場所の選定など)

講師の資格認定制度の確立

ベーシックコース I (第 6 回以降の開催、開催場所、開催時期、講師の委嘱、必要物品の
準備等)

これまでのコース参加者へのフォローアップについて

大会長との連携においてシンポジウムを企画する

機関誌編集委員会 (TCRC が存続するならば)

委員長 (Chief Editor): 岡本 哲治

他、会員から設置の要望がある委員会については、委員会設置要望書を幹事会にて審議し、その可否を決定する。

4. 日本組織培養学会 第 82 回大会 ご案内 (第一回サーキュラー: 2008 年 12 月 1 日版)

会期: 平成 21 年 5 月 18 日 (月)、19 日 (火)

会場 獨協医科大学 創立 30 周年記念館 講堂

〒321-0203 栃木県下都賀郡壬生町北小林 880

<http://www.dokkyomed.ac.jp/dusm/kankyou/index.html>

世話人:

間中研一 (獨協医科大学)

星 宏良 (株)機能性ペプチド研究所)

高橋君子 (公立大学法人 会津大学)

[大会テーマとご挨拶]

培養細胞に生命を託す = 医療に向けての細胞培養研究 =

栃の葉輝く新緑の中、都心から 100 分ほどの獨協医科大学にて第 82 回大会を催す事になりました。当大学での開催は大会を研究会と称した時期を含め 3 回目となり、日本組織培養学会の歴史とともに、重責を感じております。

さて、このテーマの意図するところは申すまでもなく、ES・iPS 細胞研究をフラッグシップとする培養細胞の医療応用に向けての強い思い入れです。山中伸弥先生が去る 11 月 14 日にコッホ賞を受賞されました。世界の研究への期待がますます高まる中、今大会においても関連研究の最新情報を特別講

演・シンポジウム・ワークショップによって存分に触れることができますよう目下企画中です。

また、「山は裾野あって高し」の如く、これらの先進研究を支える基礎研究およびその技術を発展させることは、本学会ならではの社会貢献となるという考えから、今大会においても質感のある培養研究を一般演題や奨励賞演題に期待し、併せて「細胞培養士認定」に関する企画を行うこととしております。

本年5月21日、黒田行昭先生がご逝去されましたことは、大会翌日のことだけに会員一同俄かに信じ難くありました。1年になろうとする今大会にて、関係深い三学会の合同シンポジウムとして追悼をさせていただき運びになりました。

皆様多数のご参加、ご協賛をもって盛会となりますことを願っております。また一般演題へのお早目のご応募もよろしくお願いいたします。

[プログラム内容]

1. 特別講演 ES と iPS (仮題)
2. 幹細胞培養研究の現状と将来 (仮題)
 1. シンポジウム： 基礎研究、再生医療と創薬
 2. ワークショップ (一般募集)
3. 故・黒田先生追悼合同シンポジウム
日本環境変異原学会
日本動物実験代替法学会
日本組織培養学会
4. 教育講演
5. 一般演題
6. 奨励賞対象演題
7. ベーシックコース修了者セッション
8. その他
細胞培養士指導者認定講習

* 奨励賞 *

推薦・履歴を記載する方法にご注意ください。ホームページと大会事務局からご案内いたします。

* 総会 *

5月19日(火) 13:00-13:30 (予定)

* 演題登録 *

一般演題の登録方法が変わります！期間厳守にてお願い申し上げます。

○一般演題の登録

演題仮登録期間、抄録要旨受付期間を設けました。

演題仮登録期間 2月10日~28日 (3月1日以降は新規の登録はできません。)

本登録期間 2月10日~3月15日

* 幹細胞研究についてはワークショップとしてご口演いただきます。

○その他の演題

登録期間 2月10日～3月15日

[協賛企業展示]

ご協賛いただけます企業の方々に、展示会場の用意があります。詳しくは、大会事務局からご案内申し上げます。

[大会についてのお問い合わせ先]

日本組織培養学会第82回大会事務局

獨協医科大学・研究支援センター（担当：間中）

TEL：0282-87-2253、FAX：0282-87-2138

日本組織培養学会ホームページ：

<http://jtca.dokkyomed.ac.jp/JTCA/>

第82回大会ホームページ：

<http://jtca.dokkyomed.ac.jp/JTCA/meet/y2009/index.html>

（第82回大会 世話人 間中・星・高橋）

5. 黒田行昭先生の突然の御逝去を悼む - 先生との10年 -

加治 和彦（静岡県立大学大学院・生活健康科学研究科）

先に黒田先生御逝去の悲報を緊急に会員にお知らせした。「黒田行昭先生（客員教授）が昨日（5月21日）突然お亡くなりになりました。黒田先生はこの日も午前中実験をなさり、昼食後私と別れ、一人で本の執筆の作業を始められました。その後たまたま入室した研究室の者が、机に俯せに倒れられている先生を発見しました。この間1時間20分程でした。先生は緊急救命介護の甲斐なく搬送先の病院で亡くなりました。82歳お誕生日の前日のことでした。……。私は黒田先生と教官室を約10年に渡って伴にしておりました。黒田先生のお机に先生の御著書をそえ、心ばかりのお花を手向けてあります。」

私が10年少し前静岡県立大学に赴任してほどなく、黒田先生がフラッとおいでになった。当初先生も特に目的をお持ちではなかったと思うが、話を進める内、私のところで実験研究をなさったら、と持ちかけたら、そうしましょうということになり、客員教授としておいでいただき私と仲良く教授室に机をならべることとなった。以来、私の定年までご一緒できるはずであった。先生は、週2日来られ、日いっぱい実験研究をされていた。御奥様から先生が亡くなられてからのお話として、県立大学に来る朝は、子供のように楽しそうであった、前の晩は、明日は実験しに行くんだとそそくさと早寝されたのとのこと。先生は決して手遊びに来られていたのではない。先生と私の共著の論文や学会発表の業績をものされた。最後の研究報告は、昨年末環境変異原学会のポスター発表であった（Antimutagenic activity of

propolis in cultured mung bean cells, Yukiaki KURODA, Kazuhiko KAJI, 2007)。

黒田先生は、日本組織培養学会の創世時代の蒼々たる面々のお一人であり、それらの先生方とも、そのあとに学会にはいられた多くの研究者にも実に多大な貢献をされてきた。今回はその方々にご業績を改めて述べることは控え、黒田先生の最近 10 年は如何に過ごされたかを幾つかのエピソードを交えて述べたい。その方が、黒田先生に接した方々には、先生を思い出す縁にもなるし、良い晩年を過ごされたことで嬉しく思っておられると、期待するからである。

先生はとにかく実験が好きであった。私も実験しない日はないくらいであったから、学生や院生がデスクにへばりついているとき、先生と私の二人だけが二台のクリンベンチでピペット操作をしていることもしばしばであった。「私たちだけだね、実験しているのは」と笑いあったものである。先生は（筆頭）著者としての論文をのみが科学に貢献すること、自分の存在意義はそれを作ることのみであることを常に語っておられた。研究の遅滞に関し、先生は穏やかな性格であったから、若い人たちに苦言を呈したことはないが、全てを見通されていたようである。先生ほど勤勉ではない私をどう評価されていたのか、やや心配なところである……。良き大学の最後の時代を、研究されながら楽しまれたことと思う。

昼休みは教授室で二人でお弁当を広げながらいろいろ話をしたものである。世間話から、生物の話になることもしばしばであった。記号だらけの細胞シグナル伝達の話になると、またかとの表情を示され理解しようとされたが、も一つ興味がわかないようであった。反対に発生、分化、癌化など具体的な細胞の動きが見える世界はお好きで話が尽きなかった。先生は未知なことをよく勉強されていた。400 頁近い「フェルマーの最終定理（シン著）」をまず私がよみ、黒田先生がそれを書いて二、三ヶ月かけて読み、二人ずいぶん議論したものである。私も先生がおいでになる日が楽しみであった。

先生は戦中に福井にお世話になったことがあり、福井県人会のメンバーであった。その県人会で富士登山が計画にのぼり、黒田先生は山登りが好きな私を誘ってくれた。6年ほどまえ、県人会メンバー30数名とともに先生と私は新五合目から登り始めた。2002年の夏のことであった。さすがに先生はゆっくりゆっくり歩を進められたが、無事登頂を果たされた。先生は根を上げることが潔しとしない。無理からの逃避を潔しとしないことが、先生の思いも寄らぬ突然の死の原因ではないか、と今思う。先生が亡くなる前のしばらくの間、先生は遺伝研からの退去や本の締めきり、など幾つかのストレスを感じておられたようである。

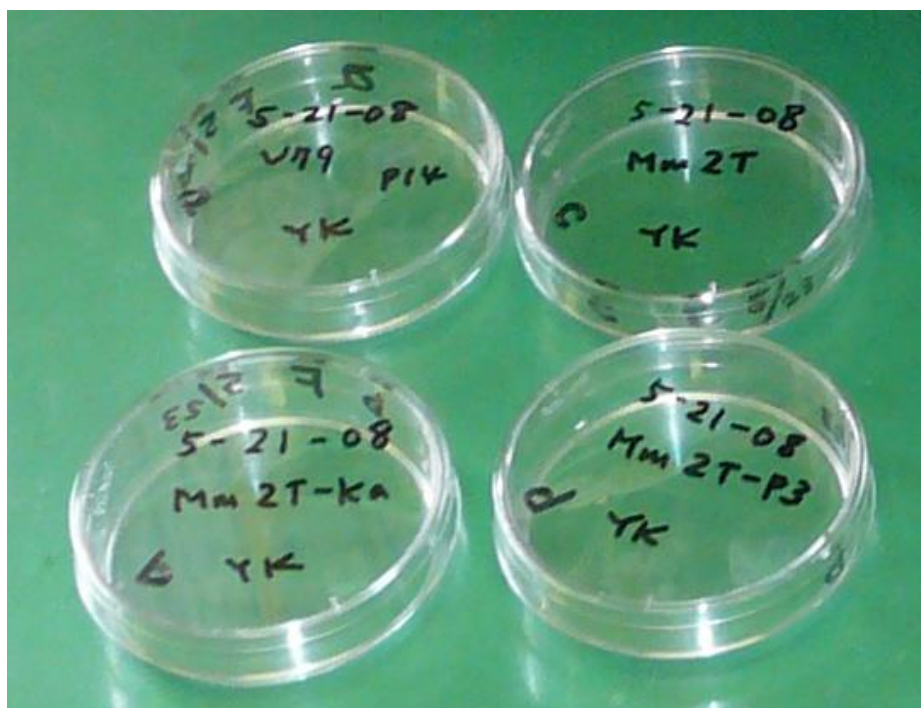
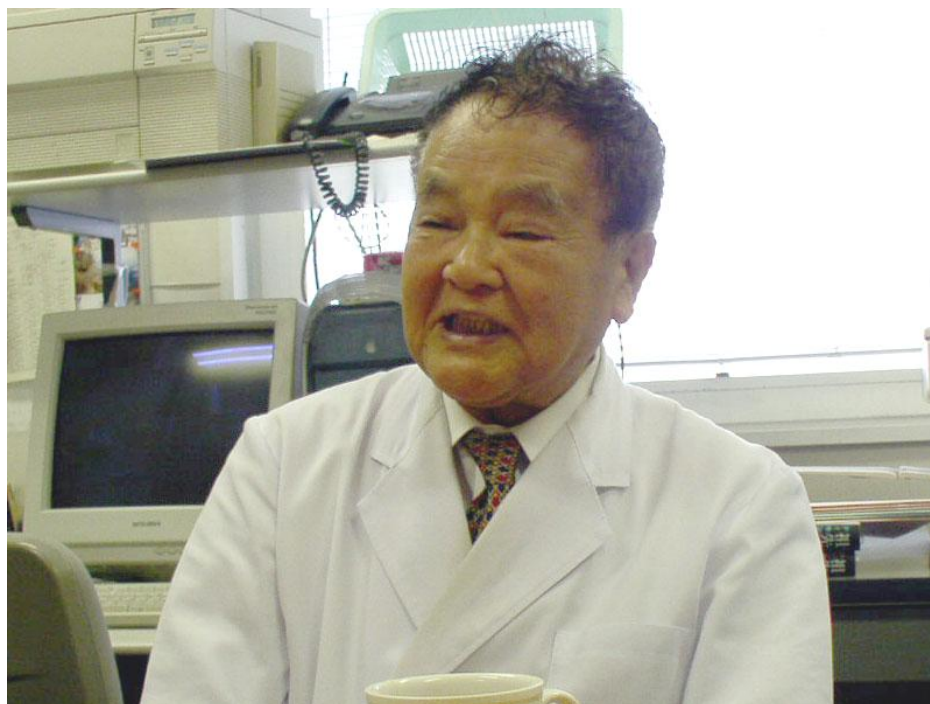
時に先生を車にお乗せすると、車内で鳴っているCDの曲目とそれに纏わるエピソードを聞きたがった。たまたまヒュッシュの「冬の旅」を聴いていると、先生は「ヒュッシュは会場で聴きました」、と言われたのでびっくりした。その後車の中で、「冬の旅」の尽きせぬ話になった。昨年のこと、オルセー美術展を鑑賞したおりマネの「ベルトモリゾの肖像」のコピーを手に入れ、教授室に飾っていたら、黒田先生はそれをたいそう気に入ってくれた。先生は「ただものではありません」といわれる。私もそう思っていたから嬉しくなって、それを額縁に納め、先生に差し上げた。今先生のお宅にあるはずである。

話は尽きない。この辺で止める。

私は黒田論を記す任ではない。どなたかそれを果たしていただきたい。皆さんどうぞ黒田先生を想っ

てください。それが、先生が今も吾等と共に生きていることになるのであるから。

最後に、写真を2葉用意した。最近の教授室の黒田先生と、黒田先生が死の数時間前に培養された細胞達の入ったシャーレである。シャーレの上の先生の直筆（細胞の種類、日付、それに先生のイニシャル YK）を確かめられたし。
(記 09/17/08)



【編集後記】

第 81 回大会を終えて研究室に戻り実験を始めようとしたまさにその時、加治和彦先生より組織培養学会宛てに、黒田行昭先生ご逝去との突然の報をいただきました。前日までのひときわお元気なご様子がまだ強く印象に残っておりましたので、にわかには信じられず、“あの黒田先生でしょうか？”と何度か聞き返してしまったのを覚えております。組織培養学会大会では、いつも一番前の席にお座りになり、手を挙げて活発に質問や討論をされておられました。もうあのお姿を拝見することはないのだと思うと、とても寂しく感じます。しかし、黒田先生の研究に対する姿勢や想いは、たくさんの研究者の心に残り、受け継がれていくものと存じます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。(mf)

2008 年もあっという間に終わってしまいますが、今年はノーベル賞を日本人研究者が 4 人受賞するなど日本人研究者にとって非常に輝かしい一年であったと思います。12 月に米国細胞生物学会に参加しましたが、若手の研究者の活発な議論、旺盛な探究心は日本の若手研究者とは少し違うと感じてしまいます。この現状を何とか変えたいと思うのですが、どのようにしたらいいのか？本当に悩ましい問題です。(ak)